

8月23日「神の聖なる神秘」ヨハネ福音書7：40～52

イエスがユダヤ教の大きなお祭り、仮庵祭に出かけて行って、人々に教え始めた時、大喜びした人たちがいました。エルサレム神殿に仕える大祭司の一派です。彼らはイエスの教えが聴きたくて喜んだのではありません。イエスを捕まえて、あわよくば殺してしまうチャンスが来たと思ったのです。早速、神殿を警護する兵隊たちを送り込み、イエスを捕らえようとなりました。ところが彼らの目論見は失敗に終わります。兵隊たちがイエス様の話に聞き入り、むしろ感銘を受けて帰ってきてしまったのです。「どうしてあの男を連れて来なかった？」問いただされた兵士たちは答えます。「今まで、あの人のように話した人はいません！」大祭司一派は捨て台詞を吐くしかありませんでした。「お前たちまでも惑わされたのか！？律法を知らないこの群衆は呪われている」イエスを群衆を惑わす似せ預言者だと決めつけ、一方的に断罪しようとしたのです。その中で一人だけイエスのことを庇おうとする人物がいました。ニコデモです。彼は以前、お忍びでイエス様を尋ねたことがあったのでした。「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」たしかに、当時の律法では、そのように決まっていました。律法を守ることを第一としていたファリサイ派にとっては当たり前の主張をしたのですが、憎しみに駆られる人々を諫める力はありませんでした。むしろ、イエスを庇おうとするニコデモのことを面白く思わない人々は彼にこんな言葉を浴びせます。「あなたもガリラヤ出身なのか？よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」

一般的にこの物語は、信仰の違いの話だと理解されています。「ユダヤ人指導者たちの不信仰」とタイトルもつけられています。「よく（聖書を）調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる」祭司長たちの言葉ですが、確かに当時、旧約聖書ミカ書によって救い主はダビデ王と同じベツレヘムの出身だと信じられていたのです。マタイ福音書ではイエスはベツレヘムで生まれたことになっていますが、たぶん歴史的にはイエ

スはガリラヤのナザレ村で生まれたのでしょうか。救い主はベツレヘムから生まれるんだからイエスは救い主ではない！イエスを救い主と信じたキリスト教とイエスは救い主ではないとしたユダヤ教の「信仰」の違いがこの物語の背景に暗示されているというのです。

ところで、私は少し違うことを感じました。祭司長たちのこの言葉に引っかかったのです。「**あなたもガリラヤ出身なのか？**」イエスを庇ったニコデモに向けられた言葉ですが、私はここに侮蔑的な、差別的な含みを受け取ったのです。

今読んでいる『僕はイエローでホワイトで時々ブルー』という本があります。イギリス在住のプレイディみかこ氏がイギリスの公立中学（元々地域で荒れた中学として有名だったが劇的に良くなってきている）に通う息子との日常を綴っています。激しい人種差別を行う美少年と一緒にミュージカルをしたり、むちゃくちゃ貧しい公営住宅に通う子と友達になったり、大人の世界の問題が子どもたちの世界でもそのままむき出しで起こる。

読んでいて思い出したのですが、私が高校～大学までの学生時代を過ごした兵庫県西宮市のことです。電車の沿線で家庭の生活水準がはっきりと線引きされる。阪急⇒山手で高級。JR⇒中流。阪神⇒貧しい。関西でも有数の高級住宅街が山手の方にある一方で、海側の工場地帯や競艇場の近くは、格安の公営住宅地が多数あり、昔からの被差別部落もありました。高校生の時、一見、仲のよさそうに見える友人たちの間で「あいつは～中学（被差別部落のある地域の中学）だからな」と陰口をたたき合っているのを聞いて、ショックだったことを覚えています。

「**あなたもガリラヤ出身なのか？**」この言葉には同じ匂いがします。イエスや弟子たちは北部のガリラヤ出身でその地方の方言で話していたことを知られています。イエスが逮捕された時に、ペトロがイエスの仲間ではないかと疑われますが、それは彼がガリラヤ訛りだったからです。「**あなたもガリラヤ出身なのか？**」エルサレムという都会で育ち、学んだ祭司長やファリサイ派たちは地方出身で学歴のないイエス一派を馬鹿にしていたのです。ですから、ヨハネ福音書が伝えようとしているのは単にイエス

を信じなかった人々の「不信仰」ではないのではないかと思います。その人の生まれや経歴によって差別し、区別し、侮辱する人間の深い深い罪の現実が描かれているのです。そんな人間の最も醜い一面の一つが、人々をイエスの愛の教えから遠ざけ、あまつさえ、十字架にかけたのです。

ところで、今日、もう一か所選ばれていたのは旧約聖書のヨブ記でした。善人のヨブになぜか不幸がふりかかる。ヨブはなぜと神に問う。「では、知恵はどこに見いだされるのか。その道を知っているのは神。神こそ、その場所を知っておられる。」神の真意は神のみにしか分からない、神の聖なる神秘について伝えています。

先ほど紹介した『僕はイエローでホワイトで時々ブルー』にこんな1節があります。「まるで社会の分断を写したような事件について聞かされるたび、差別や格差で複雑化したトリッキーな友人関係について相談されるたび、わたしは彼の悩みについて何の答えも持っていないことに気付かされるのだ。しかし、ぐずぐず困惑しているわたしとは違って、子どもというのは意外とたくましいもので、迷ったり、悩んだりしながら、こちらが考え込んでいる間にさっさと先に進んで行ったりする」母親である著者よりもずっと速い速度で息子はその問題にぶつかって何とかしていってしまいます。序章にはオスカーワイルドの言葉を引用してこう書かれています。「老人はすべてを信じる、中年はすべてを疑う、若者はすべてを知っている、子どもはすべてにぶち当たる」

本当にそうだと思います。今年も一泊保育を無事に終えました。初めて親元を離れて泊まることに不安な子どもたちもいましたが、凄いスピードで友達同士で成長して一緒に乗り越えることが出来ました。イエスも天の国に入るにはどうしたらよいか？と弟子たちに尋ねられた時にこう答えています。「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。（マタイ18：3）」

そして、今日の物語も伝えます。神の真理を語ったのは、律法の専門家のファリサイ派ではありませんでした。礼拝の専門家の祭司長でもありま

せんでした。大工の息子で地方出身者、何の学歴もないナザレのイエスだったと。イエスは言い伝え通りにベツレヘムで生まれたわけではたぶんなかった。人々が期待したように軍隊を立ち上げてローマ帝国から人々を解放するメシアでもなかった。最後には十字架につけられて殺されてしまうようなメシアだったのだ。それは当時の言い伝えとも人々が抱いていた希望とも全く違うものだった。でも確かにイエスは神から遣わされた救い主だった。神さまは私たちには本当に不思議な形で真理を示されるのです。

コロナ禍で世界中が大混乱のなかにある。私たちも問うたでしょう。「神さま、なぜこんなことを起こされたのですか？神さまの真意はどこにあるのですか？・・・」誰も明確な答えをもちません。本当に大変な状況の中で、経済的に困窮する人が多く表れています。非正規雇用、生産過剰、格差の拡大、私たちの社会の問題点が浮き彫りになっています。一方で、人間の活動が抑制されたおかげで世界中のあちこちで大気汚染、水質汚染が緩和され、自然が回復しているとの報告も聴きます。「早く元の生活に戻れますように」との祈りを聞くたびに思います。「本当に元に戻るだけで良いのだろうか」戻らない、むしろ戻ってはならない、見直したり、考え直さなければならないこともたくさんあるはずです。私たちにとって何が幸いなのかは見極めることは決して簡単ではないのです。私たちの今直面している大変な課題の中でも、私たちは神の真意を探していきたい。互いに愛し合いながら、神の恵みと神秘の中に生かされて行きたい。